第1部「アスベスト対策から見た施設管理の課題」

講演（2）「アスベスト問題を抱える資料保存利用機関の現状」

青木　睦 氏（国文学研究資料館アーカイブ研究系助教授）

「アーカイブズ」はモノとしての歴史資料を保存する以外に「施設」としての管理も重要である。現在アーカイブズにかかわるアスベスト問題を抱える事例がいくつか報告されているうち、山口県立図書館が詳細な調査経過を報告しているほか、島根県立図書館、練馬区石神井図書館等が施設内の石綿除去のため、または調査のため閲覧を停止している。

山口県では、昭和48年建築の施設に吹き付けヒル石があった。1階の展示室の含有分析の結果が2.4％であったが、これは5％以下の基準であった当時は別段問題がなかった数字である。飛散濃度0.3％未満であるが、今後も使い続けなければならない公共の図書館であるため除去作業が行われたということである。

その他博物館では北海道開拓記念館、文書館では茨城県立歴史資料館の休館という事例がある。

国文学研究資料館では、2005年8月に文部科学省からの吹き付けアスベスト使用実態調査依頼を受け、9月に業者による含有調査を行い、その調査を受けて11月に閉鎖する部分についてHPで通知を出した。

11月の検査の結果、含有率が４％であった。公共の場であり、職員の安全性のためにも、11月11日から12月20日まで歴史資料閲覧室を閉鎖し、12月1日から3日までに大気中石綿濃度飛散調査を行った。11月22日には、全館員対象に説明会を行った。

石綿濃度飛散調査は全館内20カ所、地下の収蔵庫が0.3％未満で、今のところ問題ないが、建物を継続使用する場合には処置が必要であろう。当館は平成20年に立川へ移転予定で、この時に建物を解体するのであれば、除去が

必要である。除去の問題については移転スケジュール調整とともに現在検討中である。

業務用の階段部分については、2階と3階で0.46％、4階と5階で0.69％と比較的高い数値が出ている。管理部でこれらのデータを見ながら対応を検討中である。このように各機関がそれぞれの公共性や職員の安全性を考えながら対応している。

資料に付着している石綿への対応については今のところ考えていないが、場合によっては、それらの除去の方法にも取り組まざるをえない可能性は否定できない。

当初は職員の間に、飛散濃度が低くても、石綿が付着している可能性のある資料を提供すること、また資料に接している自分たちの安全について不安があった。検査結果を分析した結果、専門家からは、そういう問題はないと言われているが、より厳しい検査方法も含め、どう研究を進めていくべきかということも今後の課題ではないか。

当館は、過去にさまざまな収蔵庫の被害を経験している。立地の特性、浸水や地震の経験などから、日常管理としてのさまざまな予防的措置をしており、今後起こりうる石綿やシックハウスの問題にかなり対応できると考えている。保存などを単独の問題として捉えるのではなく、「アーカイブズの保存管理」の問題として、問題部分を押さえておく必要があるのではないか。石綿は、我々が資料保存を考える際に考えるべきさまざまなチェックポイントの中の「今注目を集めている問題」である。生物被害などの他の問題も含め、総合的観点に立ち、それらの問題から資料を守っていくことが重要であろうと考える。